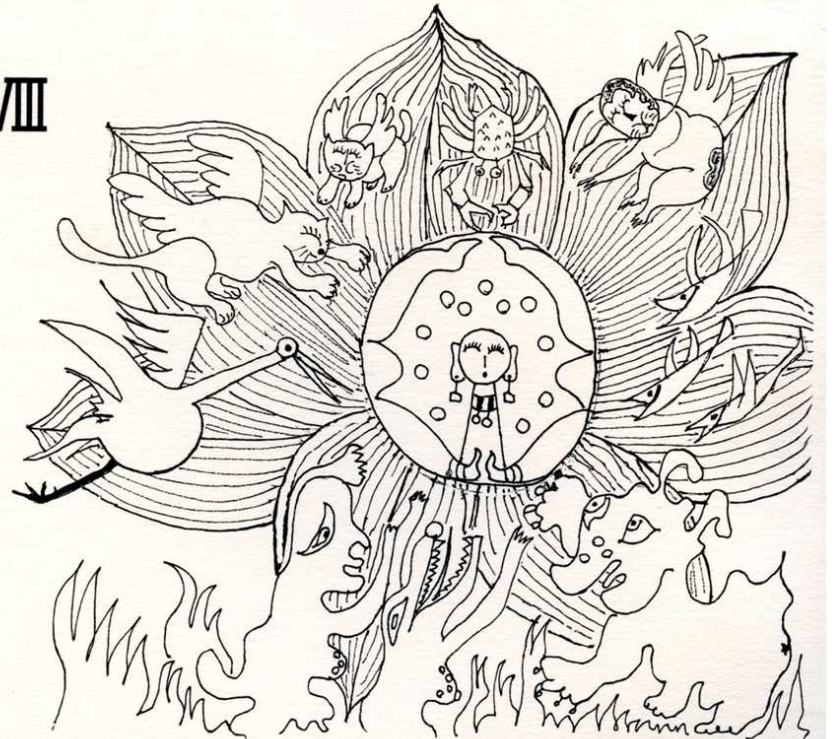


# 瓦工



XVIII



## 目次

天国詩集

細田

浩

5

詩／校歌作詞・監修顛末記

宮澤

新樹

21

浜シゲワールド―絵解き物語り―

浜野

茂則

41

伊奈町大針の行事と祭り

濱野

弘之

77

月の寺

茂木

光春

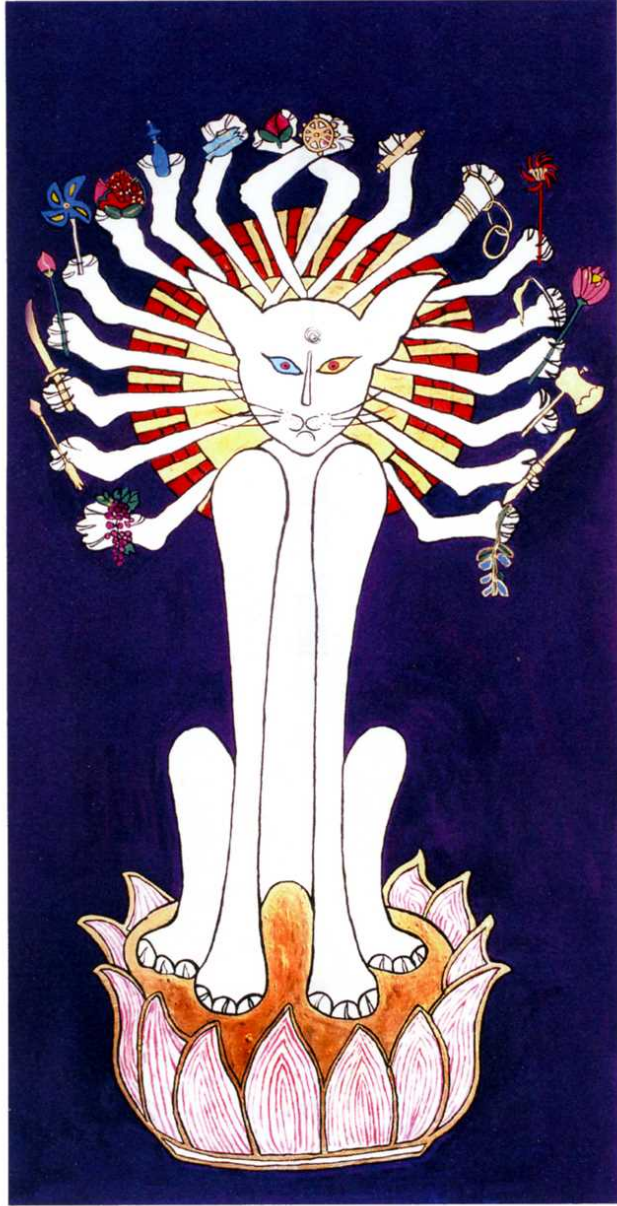
95

編集後記

茂木

光春

118



吉祥千手観音猫

浜シゲワールド―絵解き物語―

浜野茂則



## 白い福

「きつちゃんー」と私は声をかけるようになった。きつちゃんは、ある年の夏、我が家にやって来た白い子猫である。不思議なことに、夕涼みをしている白い猫の絵を次男が描いて「吉」と名付けて一ヶ月後、きつちゃんはうちに来て来た。家族のトゲが少しずつ溶けて来る。いい年になってやっと人間らしく優しい声をかけるようになったと家族に不思議がられた。猫はネズミを捕り、犬は番犬と畜生扱いの古い因習に染まっている私だったからだ。知り合いのHさんから「白い子猫を飼いませんか」と持ちかけられた。捨て猫を拾ったSさんから頼まれてるという。飼おうと家族の気持ちが一つになった。名前は決まった。あの次男が絵に描いた白猫「吉」である。瀕死の捨て猫をSさんがペットクリニックに持ち込んだところ口から小砂利を吐いたという。へなへなで吹けば飛ぶよう。吉は手のひらの上に乗る金目銀目（金と水色）の小さな小さな白い子猫だった。それが今は大きくなってすらりと座っている。観察力があって人間の動きも心もお見通しのような。手の動きが早く好奇心が旺盛で何でもできそうなのだ。「なんでも叶えてくれる千手観音猫だね」と私は吉にかたりかけた。もうかなり猫バカになりつつあるなと思った。しかし、何かはつきりわからない白い福の前兆を感じていたのだ。



くつちゃん形そのほらつ  
苦拔大地蔵菩薩

苦拔大地蔵菩薩

黒 ごめんね

長い間 ドロボーよけの番犬扱いをして

黒 ごめんね

自転車での散歩の途中

急に止まっては横腹をなめるおまえを

しかりつけたりして

痛かったんだよね

ごめんね 黒

横腹に大きなピンクの花のような肉穴が開いてきて

レントゲン撮ってもガンの検査をしてもわからず

長沢獣医さんが傷口を指の先で押すと突起物があったので 引き抜くと竹グシだった

焼きトリを竹グシごとあげた覚えはないのだけれど きっと私がやったんだろう

呑みこんで胃を通過したものの曲がりくねった腸は抜け切れず 三ヶ月経って

ワキ腹から矢のような竹グシが突き出てきた

そんな長い間にもおまえは横腹を思い出したように時々なめることはあっても鳴きもせず

私を見るといつもニコニコしていた

ごめんね 黒

おまえのおかげで

すっきり人間らしく

すなおに「ごめんね」と言えるようになりました

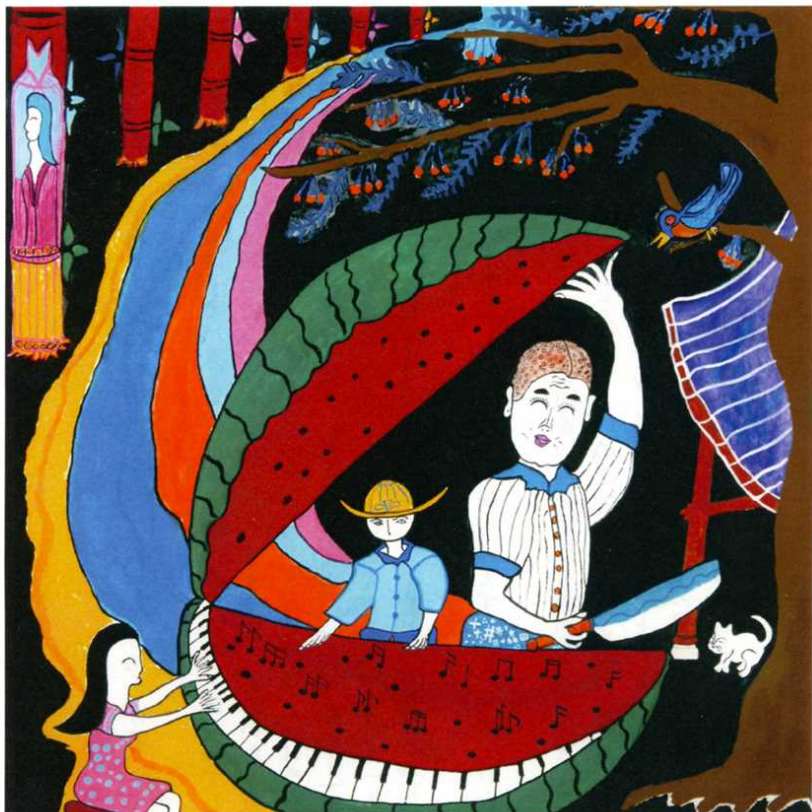
黒

享年十八歳

二〇一三年十二月二十日夜七時三十分

私を呼びながら死にました





清子さんのスイカ

## 清子さんのスイカ

妹の祥子ショウコはいつも前を向いて進んで行く。兄の一郎イチロウはいつも下を向いて休みたがる。「二人を二で割った性格ならしいのね」と母親によく言われていた。

ある日仕事が忙しい母から「となりの清子セイコオバさんちに通じる森の小道がヤブになってしまっているからこの夏休みに道作りをしておくれ」と二人の兄弟は言われた。一郎はそのままほおっておいた。夏休みが近づくと「いっ小道づくりをやるの」と毎日のように兄にせつづいた。「いくら言ってもお兄ちゃんはやらないんだから」と祥子はぷりぷりしていた。夏休みの初め、とうとう祥子は「私がやるからついてきなさい!」と一郎を怒鳴りつけた。「しよーがないからやるか!」と一郎は立ち上がった。「やりやーいいんだろーやりやー」と一郎はとなりに通じる道らしいふんいきが残っている所の竹やつるや木をメッタ切りにして「疲れた、いっぺんにできねーよ。やめたー!」と言って座り込んでしまった。

「お兄ちゃんはどうしていっぺんに何でもやろうとするの、何も考えず。いつでもゼロか百なんだから」と祥子は怒った。

「いい。よく観察して、何からやったらいいか(順番)優先順位を決めて一日にどこまでやるかを考えれば物事は解決して行くのよ。少しもむずかしいことなんてないのよ」と祥子は口ぐせのように言った。祥子の指示でやって行くうちにだんだん一郎もやる気になってきた。少しずつ順番に根気よくやって行けばできるんだなと一郎も思った。とうとうとなりの清子オバさんちの家が林の向こうに見えて来た。二人とももう汗で髪の毛から下着までびっしょりである。「もう少ししよー!」と祥子が一郎に言った時、ニコニコしながら清子オバさんが出てきた。何かしゃべっているが清子オバさんはザーザー言っていてうまく声が出ない。ノドに穴があいているのだ。何年か前にやった食道ガンの手術の跡なのだ。手まねきで家に来るようにと言っている。行くと清子オバさんが作った大きなひやしたスイカがある。それを半分にパカッと切ってくれた。そして二人に食べろと言う。一郎はガブッと食べた。うまい。こんなうまいスイカははじめてだ。見ると妹の祥子はものすごい速さで指先を動かしてスイカのタネを取っていた。一郎が「シヨコ、スイカのピアノを弾いているみたいだね」と言った。祥子もスイカにかぶりついた。「うまい! 清子オバさん」と祥子が言った。その時、自分たちが作った森の小道の方から青い風が吹いて来た。

こんな夢を見た。それがこの「清子さんのスイカ」である。昔、家族総出で「寧」の小道を作った時食べたとなりの清子さんのスイカの味は忘れない。

### 春を待つ乙女

私は近くの郵便局によく足を運んだ。他の金融機関よりも親しみやすさがあるからだ。その郵便局に私の親せきすじの新任女性局員が入ったという話を麗子お婆から聞いた。二人新任女性がいるが、どちらだろうと思った。私は会ったことも見たこともない。私はお婆の話から想像するだけだった。私はその娘さんの祖母は知っていた。色白で鼻筋の通った美形の容姿からきつとこの娘だろうと思っていた。一年が過ぎようとする頃、お婆から「Mちゃん別々の局へ移るらしいよ」という話を聞いた。仕事上か、一身上の都合でか、悩みがあるようだった。春が近くなると頃、郵便局に行った。局員以外誰もいなかった。Mさんは窓口の向こうから微笑をたたえながら「絵を描くんですってね」前から知っていることのように私に声をかけてくれた。お婆を通じて私のことを知ってくれていたのだとうれしくなった。その後、彼女の姿は見えなくなった。彼女がいなくなると愛らしく凛とした彼女の声の心に深く残った。一分一秒を争って仕事をやる時代だ。人には言えぬ悩みもあるだろう。あのすすしげなほほえみの裏には春を待つ冬の景色があるのだろうと思った。きっと春は来ると言いたかった。冬に耐えた祈りが春をもたらず絵が描きたくなくなった。私の心に残った彼女の声掛けが「名のらさね、菜摘ます娘」の万葉集の一節（ひと）を呼び覚ました。その一枚の絵がこの「春を待つ乙女」である。



春を待つ乙女





もっと光を — 聖ネギ乙女の宇宙体操 —

もっと光を — 聖ネギ乙女の宇宙体操 —

何年か前に渋谷栄一のお孫さんに当たる鮫島純子さんの原画展を「カフェギャラリーー寧」でやった。その時鮫島純子さんの談話会も開いた。二時間立ったままお話をする。カクシヤクとして凜としたその姿は咲きはじめたスイセンのようだ。八十歳から社交ダンスを始め、宇宙体操という健康体操をやり絵も文章も書き、自分の肉体も精神も常に鍛えて整える純子さんの生き方は老後の人生に迷いのある私たちにとっては滝に打たれたような清冽な感動を覚えたものである。そして若い時に洗礼を受けて以来純子さんは「この世に何のために生まれてきたのか」という問いを何十年も考えつづけた末「人のために何かをすることが使徒である」ということにたどりついた。その彼女の行動実践は耳を傾ける者を釘付けにせずにはいられなかった。その時の早朝太陽の光を食べるイメージから始める宇宙体操の感動を私は「聖なるネギのイメージで」絵を描いた。



桐山節考



## 私の前世は絵描き

カフェギヤラリー寧での私の三回目の個展（絵画展）で私は四枚つづりの板屏風に絵解き「檀山節考」（二〇八センチメートル×四二五センチメートル）を描いた。私と親交が深かった作家の深沢七郎に捧げたものだった。一応深沢文学研究を大学の頃からやっていて、「伝記小説・深沢七郎」（近代文芸社）という著書も刊行しているの  
で、私なりのイメージで代表作の「檀山節考」を絵解きの描いたものであった。その個展の時に鮫島純子さんが  
やってきて、何か感じるものがあるらしかった。「この絵のお話をして下さいませんか？」と純子さんはこやかに言われ  
た。私が直接知っている深沢七郎のことや深沢文学の核心についてべらべらと語った後、静かにはっきりと純子さ  
んは「あなたの前世は絵描きだったのよ。前世で描き足りなかったあなたが今絵を描いてるのね」と言って、後は  
語らなかつた。昔から絵を描くのは大嫌いで下手ではめられたことなど一度もない。文学表現にだけは興味があっ  
たのだが……。それが十年前の五十七歳の時、急に絵が描きたくなって、描かないと落ち着かなくなった。頭のと  
こかの小さなフタがパカッと開いたような気がした。今は絵を描くのが一番心と体に合っていて楽しいのだ。私の  
絵を見て「あなたは個人の我を描いているのではない。心の底にある人間の集合体の心を描いているんですよ」と  
言って帰って行った人がいる。その時も「もしかしたらそうなのかも知れない」と思ったことがある。  
私は「あなたの前世は絵描きだったのよ」という鮫島純子さんの言葉を今は信じている。



はまでんごくちようてんあいふそく  
破魔詔曲模様天愛不息



破魔詔曲模様天愛不息

「カフエギヤラリー寧」に時々取材に来てくれる頼もしい編集者の人がいたが、「別の若い人が取材に来ますから」と言ってその方が別の支局に転勤となってしまった。なんだ学生あがりの編集者じゃどうかと私は軽く見ていた。ところがその人に会ってみるとさりげない感じで取材しているのだけれど微に入り細に入りポイントをおさえていて、書かれた記事は簡潔にして過不足なしの完璧なものだった。「いやー、若いのに立派なものだ」と私は見直してしまった。ところが、ある時用事があつて連絡するとお休みですと係りの者が答え、また別の日電話でどうしたのかと聞くと体調をこわし、入院中だと言う。その人の家の住所を知っていたので手紙を送ったが、返事がない。これは大変な病気で、手術したり重篤な状態なのだとは勝手に推測してしまった。「そうだ、その病と闘っている人を救い出す祈りの絵を描こう」と決め込んでしまった。それがこの一枚の絵「破魔詔曲模様天愛不息」である。



おれはお前だ



## おれはお前だ

ヨコカワさんは自分の生まれ故郷でホームレスをしている。すべての系類とは縁が切れているらしい。周囲の人は彼のことを知っている。こんなところに居たくはないのだからうけれど外には行けないのだ。恥なんてものはもうすつとんでしまったのだ。駅の周辺と公園とコンビニのあたりを一年中厚着をして行ったり来たりしている。自転車にかサ、毛布、ペットボトル、もう山のようにビニール袋が積んだり縛りつけられたりしている。まるでビニール袋のゴミの山をラクダの背に乗せて運ぶキャラバンのようだ。

コンビニで出合くと私は「ヨコカワさん」と心の中で声を掛ける。コンビニの中からガラス越しにゴミ箱近くの後ろ姿を見ても何かを感じるらしくヨコカワさんは振り返って「ジロツ」とにらみ返す。「何見てんだよ。おれはお前だ」とでも言うように。



アリサ絶叫ライブ



## アリサ絶叫ライブ

遠くから聞こえる。

「そんなにかわいんかい！　かわいんかい！　ダメナンダッテー！　オメーらがオレをほめねーからこーなっちゃったんじゃねーかア！」

今日もまたアリサ絶叫ライブのはじまりである、かすれたよく通る声でまた叫んでいる。年格好は五十才位、やつれた長髪のアリサは暑い日でも冬のコートを着て、ブーツをはき、フリルのついたスカートだ。バッグを肩にかげながら農家の空地や横道の生垣の葉をムシリはじめる、右に行ったり左に行ったり、演劇でもやっているように走り出す。そうかと思うと泣きながらまた絶叫する。「フォーク取ってよオ。フォギってなんだよオ。反対じゃねーからなア。家に入ってるんだってー。弟兄なんだから全部持つてこいよオ。バカヤロー！　オメーは甘えすぎなんだよオ！　PTAの校長先生！　言ってましたよねー！」息絶え絶えになるとひざを地面に突いて椿の真つ赤な花をムシリ出す。私は椿の垣根のすぐワキの畑で息を殺している。するとアリサと同じ呼吸になってくる。

ある春の日、観音寺近くの千坪もある菜の花畑の畦道沿いをアリサは両手でかかえきれないほどの菜の花の束を大事そうに持って、歩いていった。そして立ち止まったかと思うとまるで手品師が次々と玉かナイフを頭上高く投げるように投げ上げはじめた。黄色い菜の花は風車のように円を描いて彼女の後方に落ちていく。「アリサー！」と私は心の中で呼びかけた。空は真青だった。



猿紳士の彷徨



## 猿紳士の彷徨

猿紳士の家族は命からがら都市から逃れてきた。しかしただ逃れて来ただけで何のあてもない。菜の花畑をかきわけてひたすら歩いて来た。疲れきった母猿と、その胸でおびえる長男猿。猿紳士も腰を落としてしまった。猿紳士の左手の中には生まれて幾月もたっていない子猿が冷たくなっている。それでも猿紳士はまっすぐ前を向いて右手の卒塔婆<sup>そとば</sup>を突き出していた。

南無遍照金剛法界平等利益（大日如来に帰依します。この世のすべてのものに平等の恵みを）

私は春先、都市郊外の一面の菜の花畑を見ているとそのたびにこんな幻想を視るのである。